

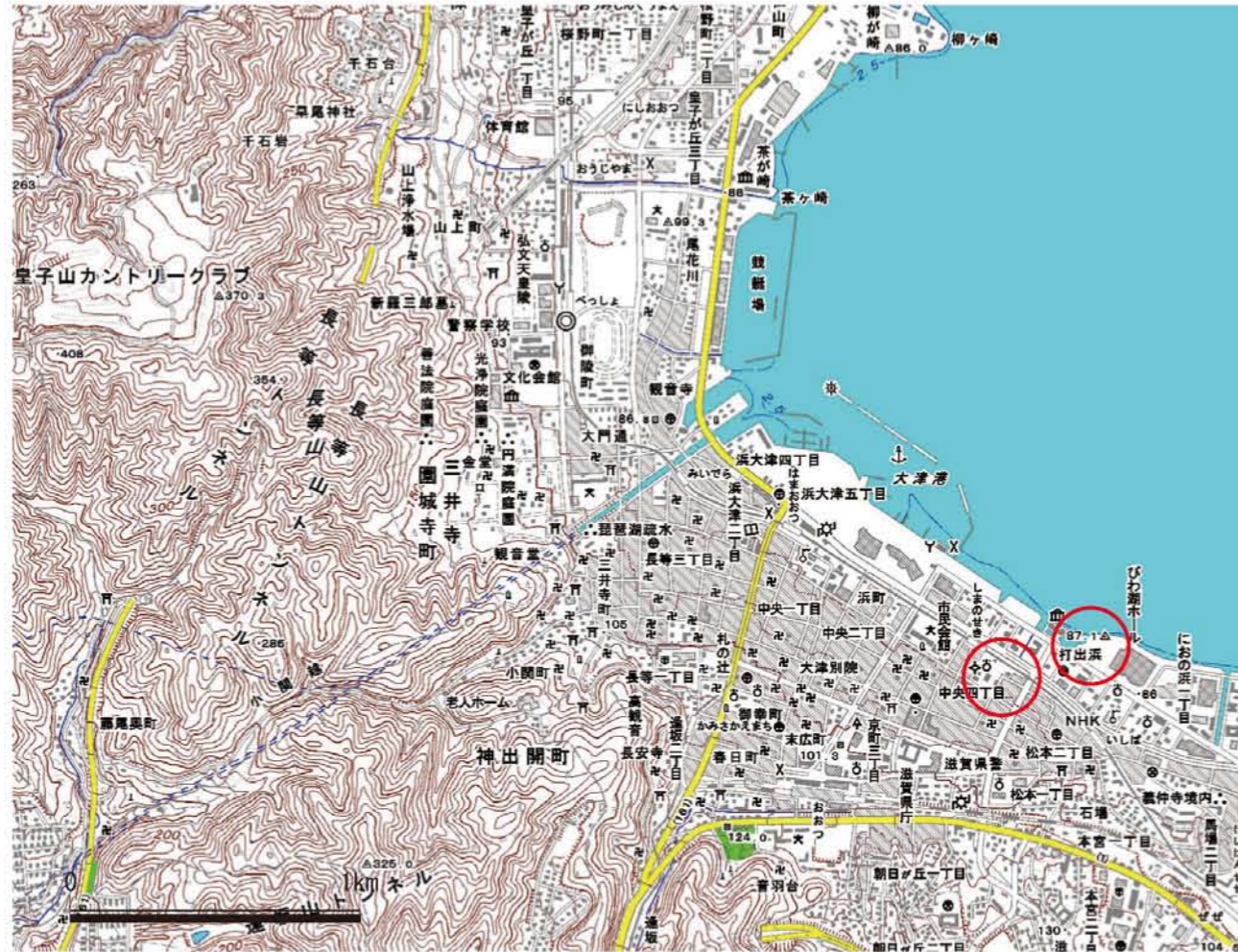
周辺の
みどころ

三井寺

天台寺門宗の総本山。
境内には天智・天武・持統天皇の御産湯に用いられたと伝えられる関伽井（あかい）と呼ぶ井戸があり、「御井（みい）の寺」と呼ばれ、後に「三井寺」と通称されるようになった。
国宝の金堂を始め、釈迦堂、三重塔、唐院など諸堂が建ち並び、国宝、重要文化財は100余点を数える。
近江八景の一つ「三井の晩鐘」としても広く知られている。



三井寺 関伽井



【アクセス】

- 石場常夜燈
JR「大津駅」から徒歩約17分
京阪電鉄石坂本線「石場駅」から徒歩約5分
- 小舟入常夜燈
JR「大津駅」から徒歩約11分
京阪電鉄石坂本線「島ノ関」駅から徒歩約3分

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】
(関連文献/関連施設)

- 滋賀県教育委員会『中近世古道調査報告3 東海道(一)』平成12年
- 藤井謙治編『近江・若狭と湖の道』吉川弘文館 平成15年

急がば回れ 石場津の常夜燈

大津市中央四丁目・打出浜

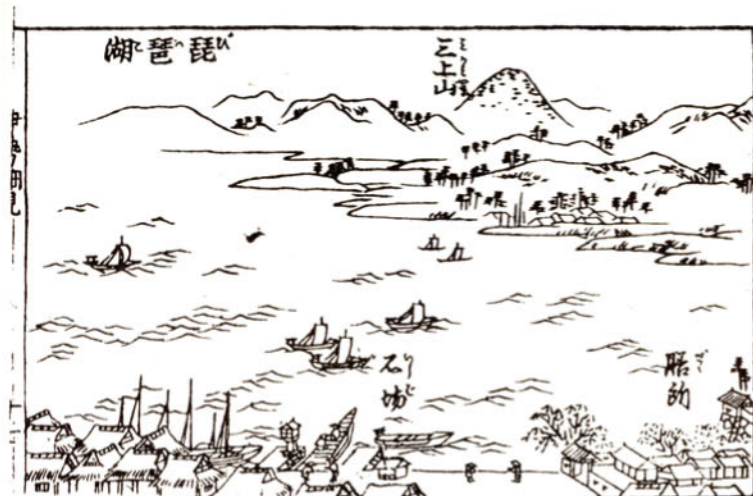


なぎさ公園に移設された石場の常夜燈

江戸時代に東海道の宿場町として賑わった大津町の東の外れ、松本村地先の琵琶湖岸に設置された船着場が石場である。江戸時代には東海道の間道として利用された対岸の栗太郡矢橋村（現在の草津市矢橋町）との間の渡し船で賑わった船着場であり、『近江名所図会』などには湖中に突出した石垣組の船着き場が描かれている。

この石場の船着場に弘化2年（1845）に建立されたのが、「石場津の常夜燈」である。現在は300mほど位置を移して、びわこホール横のなぎさ公園内に建つ高さ約8mの大常夜燈は、江戸時代に盛んであった湖上交通を偲ぶことができる貴重な水の宝である。





「伊勢参宮細見図」より（上）

小舟入常夜燈（下）
常夜燈背後に見えるのは
京阪電鉄石山坂本線と滋賀県警



急がば回れ 石場津の常夜燈

所在地 大津市中央四丁目・打出浜

急がば廻れ

京都から東海道を東へ向かうと、大津宿を出た松本村地先の石場で琵琶湖岸に出る。ここから対岸の矢橋までの間、湖上五〇町（約5km）の距離を運ぶ渡し船が、旅人たちに利用されていた。この「矢橋の渡し」の船賃は、江戸時代初期の元和二年（1616）、幕府年寄衆連署によって1人6文と定められたことが知られている。

矢橋は、近江八景の1つ「矢橋の帰帆」で知られた港で、かつての突堤の石垣や弘化3年（1846）建立の常夜燈が、往事の面影をわずかに伝えている。矢橋の港からは、東海道草津宿

の南の外れの矢倉村まで通じる「矢橋道」と呼ばれる街道が延びていた。

「矢橋の渡し」は比叡おろしなどによる荒天時には、運航の遅れや中止されることもあったため、「武士のやばせの舟は早くとも急がば廻れ勢多の長橋」と歌われた。この歌は江戸時代初期に京の僧侶安楽庵策伝が記した『醒睡笑』という笑話集によれば、戦国時代の連歌師宗長が詠んだものとされるが、「急がば廻れ」という諺として今日でも広く知られている。



石場と小舟入

石場は江戸時代には独立した村ではなく、志賀郡松本村に属していた。享保19年（1734）に完成した『近江輿地志略』には、「相傳中古、石工此地に多く在住して、此濱邊に石を積みおける故の名なり」と石場の地名の由来が記されている。

江戸時代の石場の様子は、寛政9年（1797）に刊行された『近江名所図会』などに描かれており、茶店が軒を並べて旅人たちで賑わっていた様子をうかがい知ることができる。明治以降には湖南汽船の乗船場が置かれていたが、その後は東海道本線開通などに伴って湖上交通が衰退し、湖岸の埋め立ても進んで、往事の景観は失われていった。石場の西、大津宿内の小舟入（大津市中央四丁目）は、石場（松本浜）と並んで、矢橋との間の渡し船で賑わった船着場であった。慶安2年（1649）には松本浜と小舟入との間で湖上船の通運・運賃をめぐる争ったことが記録されるなど、両者の間では江戸時代を通して、矢橋へ向かう旅人や荷物の輸送をめぐる、度重なる相論が行われた。

小舟入には、文化5年（1808）に「京都恒藤



小舟入常夜燈基壇銘文（上）
旧矢橋港現況（下）

講」が建立した常夜燈（大津市指定文化財）が建てられている。基壇部分には建立にかかわった京都や大津の町人の名前が多く刻まれている。付近は埋め立てられて旧状を失っているが、船着き場としてにぎわった往時には、水茶屋が軒を連ねていたという。

常夜燈

石場津の常夜燈は、弘化2年（1845）に現在の大津警察署付近に建立されたものだが、昭和30年代以降、湖岸が順次埋め立てられて都市化が進展するのに伴って、昭和43年に県立琵琶湖文化館前に移され、その後、平成17年に現在のなぎさ公園内に移設されたものである。

鍵屋傳兵衛と船持中の発起によって建立されたもので、常夜燈の基壇部分には近江国内のほか、大坂・京・尾張などの大勢の寄付者の人名などが刻されている。製作にあたった石工棟梁は、大津町人であった近江屋源兵衛であった。

寛政9年（1797）刊行の『近江名所図会』には、現在の常夜燈に先行して建てられていたと考えられる石灯籠が描かれており、これを大規模に建て直したものと考えられる。